

淵澤能恵

—韓国女子教育に献身した女性—

宮澤 正典

朝日新聞に淑明女子大学についての、こんな記事があった。「韓国の名門女子大は経済危機克服対策として卒業生が最大1年間無料で学生の身分を維持できる『ポスト学士課程』を来年3月の新学期



在米中の淵澤能恵
(同志社社史資料センター・写真パネル所蔵提供)

から始める(2008年12月25日)。「創立九十一周年、開校五十九周年記念事業として、小説家のイ・ホ Chol(李浩哲)氏に名誉文学士の学位を送った。授与の理由は分断文学の分野で卓越した作品を残し、南北統一の文化研究と韓国文化の世界化に寄与したため」で、韓国の女子大学が男性に学位を出すのは最初であり、作家の後藤明生氏とは小学校の同窓生とコメントしている(1997年6月3日)。

このように注目される淑明は現在、女子中・高等学校、女子大学校(文化、法政、経商、理科、薬学、生活科学、音楽、

美術の8学部)からなる名門の総合学園である。学園のルーツを辿ると淵澤能恵に行き着く。1906(光武10)年に韓国女子教育の先覚者とされる李貞淑によって明新女学校の校名で創設されたが、その礎を築くにも、その発展においても淵澤を欠いてはなかったと言ってもよい。彼女は新島襄在世中の同志社女学校で3年間学んでいる。

●生い立ち

淵澤能恵は1850(嘉永3)年、奥羽の国(岩手県石鳥谷町)で生まれ、間

もなく養女として育てられた。父武市は下級武士だったが寺子屋の師匠などもしていたという。幼時に養父が病没、能恵は養母カルと共に彼女の実家、さらにカルの再婚先に伴われた。この間寺子屋小野塾で学び、履物店に奉公人として出されてからも個人宅に漢文を習いに通ったという。当時の女子としては稀ではなかったかと思われる。明治維新後、実兄恒人は釜石に出て働いていたが、そこに身を寄せることになった。それが能恵の人生の転機となったと言つてよい。

●渡米から同志社女学校へ

釜石には幕末日本最初の近代製鉄所が置かれ、明治半ばには銑鉄生産量が全国の過半を占めるまでに発展する。そこに雇い外国人の鉱山技師G・パーセルがいた。この一家が帰国するに当ってアメリカでのメイドを伴なおうとしていた。そのことを知った能恵はこれに応じた。1879(明治12)年、29歳のときであった。ロサンゼルスのパールセル家に一年余り、次いでサンフランシスコのミス・プリンスの家でもメイドとして働き、そ

の間に英語と家政を習い、クリスチャンになった。女史が熱心なキリスト教信者であったことと無関係ではない。1882年に帰国したのは郷里の養母のたつての督促によるが、彼女の渡米目的が勉強であったから、帰国後もそれを捨てがたかった。

この4月、32歳の能恵は同志社女学校に入学する。同志社を選んだのは女性宣教師A・J・スタークウエザーを中心とする事実上ボーディングスクール(寄宿学校)の性格をもっていたことが関係していたかもしれない。寄宿生は揃って同志社教会の礼拝に参列していた。淵澤はかなりの年長で、そのことは同時期の生徒たちには印象が強かった。麻布えい(1888年、同志社女学校本科卒業)は淵澤のことを「米国にいて働いて居られましたが、帰朝して同志社女学校の生徒となりました。此人も亦非常に評判の善い徳望家で、なつかしみのある人でありました。私は同室になったことがあります。注意深い母様の様な人であると思いましたが、善くない人があれば、其人の為に泣いて説かれました」。親を離れて

寂寥を感じて居りました小さい私共に対して、実に温い親切をかけて呉れました」。人の為に溢る、様な愛をかけなければなら無いと云ふ事を知りましたのは、誠淵澤様の良い感化であると感謝して居ります。世の中に淵澤の枝様の様な立派な人は決して二人と無いと云ふ事を、其当時固く信じて居りました」と回想している。淵澤はその一方で「笑はず会の御大将で襦袢を着て片手に笄さきを持って、阿法弥羅經の真似をして腹の皮を繕繕らせられました。此様な笑ひの種は後から／＼百出して尽きませんでした」(田中竹、1884年、女学校邦語科卒業)という側面もあった。高畑菊(1884年、女学校邦語科卒業)は卒業後しばらく母校で授業を受け持ったが「卒業したばかりの子供でしたから、のゑさんが後の方の席に居って私に赤んべいをして見せたので、私は余り可笑しくてつい吹き出してしまいました。一同大声で笑いさざめくというようなこともあった。ただ騒ぎをスタークウエザーが聞きつけて来て「先生が先き立つて笑ひ出すとは怪しからん事で、先生の威厳を保つ事は出来ません」と叱られ

たことを記している(『創設期の同志社』同志社史料室)。淵澤は1885年6月中途退学している。「惜しい事に、余りに人望がありました故、当時の宣教師に憎まれ、且つ意見衝突の為中途退学されました」(麻生急い)と認識された側面と、学費が続かなかつたためとする説がある。高畑は「此方は労働の為米国へ渡って少しの学費を作り半官費で在学して居りました」と述べているが事実はその辺にあったのか。

●日本の教職

淵澤は同志社女学校中退の年に上京して東洋英和女学校で教職に就いた。1888年、サンフランシスコで仕えたミス・プリンスが一橋高等女学校教師として来日、彼女の要請により同校に通訳兼舎監として勤務した。その後、下関洗心女学校、福岡英和女学校を経て、1893年1月熊本女学校に移ったが、翌年病氣のため辞任した。

東京では麹町、四谷、小石川と短期間に転寓した後、1900年9月経済的基礎をつくることを企画して梅屋文具店を

開いた。期せずして、ここは熊本英学校閉鎖後に一部生徒たちが上京して東肥義塾に集った若者たちと関わりを持つことになる。開塾式には徳富蘇峰、海老名弾正らとともに淵澤も参加した。同塾には、後に淑明女学校時代に学校運営に加わる松本雅太郎もいた。淵澤は小崎弘道の番町教会に出席していたが、そこでは番町教会活動を支援した岡部長職との接触もあり、じつはアメリカから帰国の船中からの知己でもあった。熊本、東京における人脈が、彼女の次の人生への転機につながるようになる。

●韓国に渡る

1904年に養母を失い、文具店経営もゆきづまっていたころ、貴族院議員、子爵岡部長職夫妻が韓国視察旅行に誘い、1905年5月韓国に赴いた。旅行中赤痢にかかり、療養中にこの国の女性たちのおかれた状態を見て、余生をこの地で教育に捧げる使命を感じたという。55歳であった。一方、岡部夫人抵子は愛国婦人会朝鮮支部設置と朝鮮の女子教育の目的を抱いていた。韓国自体が開国、開化



淑明女学校第1回卒業記念 1910(隆熙4)年
中央に李貞淑校長・淵澤能恵(『淑明九十年史』より)

垠は梨本宮守正の王女方子と結婚)によつて設立され、初代校長に李貞淑が任じられた。彼女は韓国教育史上最初の韓国女性校長であった。学監兼主任教師に淵澤が任じられたのは、彼女自身が女子教育の必要について説いていたが、ジャ



淑明女学校入学記念 1924年
中央に李貞淑校長・淵澤能恵(『淑明九十年史』より)

ナリスト菊地謙讓、朴成桂を介して嚴妃と接することが出来たからであった。同校は日本式教育を範とし、とくに学習院のような韓国貴族学校として始めようとし、校長は名門、良家を訪問して入学を説得した。李朝宮中はこの開校に満足して、学費、経費は嚴妃が負担することから始めた。しかし、間もなく世の旧態旧俗を打開するため一般教育機関として門戸を開放した。李貞淑と淵澤は以心伝心の仲と言われるほどの相互に信頼関係を結んで学校運営をおこない、淵澤は学監として生徒と寝食をともにして教育に当った。「身を以て子弟に及ぼす感化」が彼女の教育方針であった。生徒間の諍いには仲裁をとりもち、悪戯のやまない生徒を膝元に呼び寄せ、涙を流して自分の教育の至らなさを神に詫びたりもした。同志社女学校時代の淵澤を彷彿とさせる。韓国併合後の1911年朝鮮教育令により女子高等普通学校になるが、財団法人設立願申請に対して総督府は修正を要求し、設立者を淵澤と李貞淑を併記して再提出して1912年に認可。寄附行為では、淵澤を理事としている。併合後は

にもなつて女子教育にも変革がなされ、1895年の甲午改革における教育立国宣布の詔勅によって、儒教一辺倒の教育から実用的な国民教育方針をとるという背景があった。しかし、韓国人自身の手で設立された女学校はようやく1906(光武10)年になつてであった。

淑明女学校はその1906年5月嚴皇貴妃(李朝最後の皇太子李垠の生母、李何かとそのような圧力が加わるが、淵澤はむしろ両者の間に立つて淑明の教育理念に尽くした。東肥義塾出身の松本雅太郎は後に淑明学園財団の理事、総督府の学部(文部省)に勤務したが、淵澤にとつて心強い支援者となつた。松本は度たび同志社女専を参観に訪れたが1922年7月には淑明の朝鮮人女教師4名をともなつて訪問し、寄宿舎に滞在して市内見学もしている。他方、明治天皇誕生慶祝式典(皇国臣民化)拒否、1919年の三・一独立運動への参加(表を参照)、1927年のある日本人教師免職ほかを求めた抗日盟休は父兄会を巻き込んだ。淵澤は淑明と総督府の間に立つて解決に腐心した。抗日示威運動などで連行された生徒を「この子は私の生徒です」と毅然として主張して当局と対抗した。その淵澤を「侵略の先兵」と批判する人たちがあつたが、『淑明七十年史』の「舎監の印象」における卒業生たちの淵澤への敬愛の念を表わす回想のあることを記しておきたい。「仁慈なお婆様」として多大な感化を与え、卒業後も母校を訪れ学監を仰いだという。1928年淑女会(同



同窓会朝鮮京城支部会 1932年 4月16日
前列中央淵澤能恵 (『同窓会学文会期報』第57号より)

●同志社同窓会と淵澤

淵澤は同志社女学校を卒業しなかつたが、同窓会発足のときから入会して、同窓会報『女学校期報』には彼女の動向が逐次報じられている。淵澤自身、朝鮮女子教育について寄稿した。『年寄り』と云はれるより『老青年』と云はれる方が好きです、老青年の係って居ります事業

は新同胞の姉妹達の教育で母校の発展と同じ歩調を取って居ります、此秋は丁度ゼームス館そっくりの新校舎を建築しましたし生徒の数も同じ位あります又表には明にして居ませんが教職員の重なるものが基督者であるために母校と同じ精神の下に同じ事業を営んで居ります(1919年)。「毎日この愛くるしい朝鮮女子の為に、はたらくのをこの上ない楽しみとして暮らしております」(1929年)などと語っている。

同窓会京城支部の集いには「私共の良いをばあ様である淵澤をばあ様」と敬愛された。同志社女専英文科の修学旅行では淵澤に訪れて「慈愛に満ちた面持」の淵澤の淑明についての話に耳をかたむけた。京城支部は彼女がそれぞれ会長と支部長をしていた組合教会婦人会、矯風会

宮澤 正典(みやざわ・まさのり)
1933年長野県生まれ。59年同志社大学大学院文学研究科文化史学修了。2004年、女子大学名誉教授。文化史学会評議員、日本イスラエル文化研究会理事、理事長、日本ユダヤ学会理事を歴任。専門は歴史学。著書に『増補ユダヤ人論考・日本における論議の追跡』(新泉社1982年)、『日本人のユダヤ・イスラエル認識』(昭和堂1980年)、『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文獻目録1877〜1988』(新泉社1990年)ほか

서울의 女學生 萬歲 示威 運動 狀況 (1919-1929)

학 교 별	학생 총수	만세참가수	학 교 별	학생 총수	만세참가수
淑明女子高普	406	전 원	京城女子美術	48	28
梨花女子高普	310	전 원	泰和女子學校	103	20
同德女子高普	190	전 원	京城實業女校	112	전 원
培花女子高普	200	전 원	貞信女子學校	13	전 원
京城女子商業	282	전 원	權和女子學校	265	3년제외전원

* 京城市内女學校 萬歲事件報告 公判概況
(『淑明九十年史・1906~1996』68ページ)

窓会)は師恩館を建築し淵澤の舎室に使用するように贈呈もしている。

1935年李貞淑校長が永眠。翌年86歳の淵澤は老患のなかにあつたが肺炎を併発して永眠した。2月10日淑明の校庭でキリスト教式による学校葬が挙行された。同窓会誌『淑明』は淵澤学監特輯号として編まれ彼女を追慕した。『七十年史』には「一九〇六年開校に参加して満



朝礼での李貞淑校長と淵澤能恵 1930年 (『淑明九十年史』より)

淵澤 能恵 (ふちざわ・のえ)
1850.5.8~1936.2.8

岩手県生まれ、1879年渡米、1882年帰国、同志社女学校入学、1885年中退。東洋英和女学校、熊本女学校などで教鞭をとる。1906年韓国明新女学校(淑明女学校)設立に参画、学監、理事などを歴任。在朝鮮愛国婦人会評議員、組合教会婦人会長、矯風会支部長。勲六等宝冠章、東亜日報教育功労賞ほか各種の功労賞を受賞。

三十年間基督教精神をもって学生を指導、仁慈な教育実務者である淵澤学監は財団法人代表として学校運営の責任をもって活躍した。日頃淑明が大学課程まで設置し淑明の精神をもって韓国女性の指導者を養成しなければならぬとの抱負を説き、遺言書では「万一財団で死後私に与えるものがあれば、年来の願望である女子専門学校設立の際それを使用するよう」と記したとある。四年後の1939年に設立された淑明女子専門学校設立基金の一部にその一万円が加えられたという。

支部と合同追悼会を開いた。

参考文献

- ・村上淑子『淵澤能恵の生涯―海を越えた明治の女性』2005年、原書房
- ・金貞順『淑明七十年史』1976年、淑明女子中・高等学校
- ・『淑明九十年史(一九〇六―一九九六)』1996年、淑明女子中・高等学校
- ・石井智恵美「淵澤能恵と『内鮮融和』―日本の朝鮮統治下における女性クリスチャンの一断面―」1992年『基督教論集』第35号
- ・江藤伸子「淑明女学校と熊本英学校」2000年、『熊本近研会報』第34号
- ・『公報淵澤能恵通信』2005年1月創刊、淵澤能恵を顕彰する会(花巻市石鳥谷町)